

實在と教育

大西友太

吾々は感覺的認識について反省するならば、悟性の認識に進まざるを得ぬ、この認識について反省するならば、理性の認識に進まざるを得ぬ、悟性は感性の自己意識であり、理性は又悟性の自己意識であるが、吾々が悟性認識の反省によつて、理性認識に入つたときに於ては、コーエンも考へて居る如く、最早經驗の對象ではなく、經驗その者を對象として居る。随つてこゝに所謂超越的對象として物自體なるものが、吾々の哲學上の問題となつて來る譯であるが、勿論この超越的對象といふものは、吾々の全體的認識のイデーであるから、之れに獨斷的に客觀的實在を與へることが出來ぬ、物自體は理性の必然的概念であるから、吾々はその認識に當つては、之れを定立せざるを得ぬ、この定立のないときは、自然の究竟的認識は得られぬが、全く吾々の認識上では達することの出來ぬ目標である。コーエンがカントの經驗說に於て、物自體を以て極限概念である、方法論的認識の無限の課題であるといふことを主張するのは、

即ちこの意味によるものであつて、一般に批評哲學に於ては、この精神は誰人も一樣に承認せねばならぬ所である。併し認識論上のこの意味は容易に徹底せぬのであつて、實は批判哲學の創設者として、物自體の理念であるべきことを極力主張したる所のカント自身すら、猶ほときにその物自體なるものを以て、感性の感觸以前に於て、超越的に存在せるものとなし、動もすれば自然的形而上學的の獨斷的考へを有して居つたのではないかと疑はしむるものあるは、人の知る所である。

言ふまでもなく、カント哲學が、我が哲學界に於て、不朽の功績を垂れたのは、その批判的精神の徹底にある。カントはこの精神によつて、人も知れるが如く超越的形而上學的實在を設定して、之れを認識せんとする所の認識模寫説を破棄して、批判的に對象の根柢を意識一般に求め、かゝる對象それ自身といふものは、吾々の認識に於ては、何處迄も極限概念であり、理念であるといふ考へ方をなしたるにある。こゝに哲學のコペルニクスの轉廻のあるとは、多言する迄もない所であつて、この立場からいふときは、感性の感觸以前に於て、凡て吾々の認識の制限を受けぬ所の實在のあるといふことは、明らかにその批判的態度を裏切つて、素朴實在論の獨斷に歸るものといはねばならぬ。恐らくカントが感性の感觸以前に物自體があるといふたのは、その

物自體なるものが凡ての感覺の制約を受けぬ所の、これを超越したる實在であるといふ考へから、つひその先驗美學に於て、感性の感觸以前に於て、存在するといふやうなことをいふた點もあるのではないかと思ふ。しかしそれは兎に角、たとへ如何なる事情あるにもせよ、現象の *Korrelat* として、物自體といふやうなものがあるといふ様なことは、批判哲學から見るときは、全く容しがたき矛盾である。吾々は何處までも、かゝる獨斷的實在の考へ方を一掃せねばならぬ。吾々は何處までも之れを以て、認識の極限であり、理想概念であるといふことを記憶し、吾々が凡ての認識に於て、最高の統一的體系を維持するになければならぬ理念であるといふ精神を徹底せねばならぬ。所謂 *Weltddee* として、認識の統整原理であるといふ精神を徹底せねばならぬのであるが、余はこの精神を徹底する所に、新らしき意味に於て、而も唯一の新意義に於て、人々の希望する所の新形而上學が成立するのではないかと思ふ。

カントは物自體を以て理念であると考へ、その認識すべからざるを極力主張すると共に、實踐理性の要請として、その實在を肯定したことは、人の知る所であるが、余はこの理念として要求する所の論理の根柢には、純粹なる形式に於ける理性の直觀として、その實在を肯定すべき餘地があるものと思ふ。勿論吾々はカントも考へた如

く、絶對又は實在若しくは神といふやうなものは、理性認識に於ては統整原理であつて、吾々の表象し得べき方法で、客觀的實在を考へることが出來ぬ。吾々はかゝる理想に對して、その客觀的影像を作るといふことをしてはならぬ。何處までも、Das Ideal des höchsten Weyens ist nichts Anderes, als ein regulatives Prinzip der Vernunft, alle Verbindung in der Welt so anzusehen, als ob sie aus einer allgenugsamen notwendigen Ursache entspränge, um darauf die Regel einer systematischen und nach allgemeinen Gesetzen notwendigen Einheit in der Erklärung derselben zu gründen. (Kritik d. r. Vernunft. Univ. Bibl. S. 486) といふことを考へねばならぬのであるが、余はかく考へねばならぬといふ論理の必然の根柢には、理性それ自身の純粹なる形式に於ける直觀がなければならぬと思ふ。吾々の認識では、物自體は極限概念であつて、之れを認識することが出來ぬ。認識對象としては、全く捕捉すること能はざるものである。

何處までも認識のイデーであつて、吾々はその認識過程の無限進歩の最後の場合に於て、之れに達せねばならぬといふことを、理想として、要求するのみである。併しこの要求があるために、吾々の認識が成立し、つまり現實的には認識されぬに拘らず、これを要求するために、吾々の認識が成立するものとして見れば、論理的には、この要

求が認識の根柢となつて居らねばならぬことは勿論、吾々の一切の認識作用とは獨立にその超越的妥當を有せるものと見ねばならぬ筈である、リッカートが當爲を肯定する活動の意味といふものは、その活動と獨立に妥當する所の當爲を承認するものであり、妥當の點から見て、判斷意識一般を超越する當爲を承認するものであるというて居るのは、これと同意味であるが (Rickert, *Gegenstand der Erkenntnis* 4. u. 5. Aufl. S. 108) 勿論かゝる超越的妥當に於ては、その論理以前であるために、最早主觀と客觀との區別はなく、之れを超越したる所に、理性自身の純粹なる自己直觀に於ける、理念の實在的肯定がある筈である。ショーペンハウエルの叡智の直觀はこゝに眞理を有つて居る。

この理念は何處で最も權威ある眞理であるかといはゞ理性それ自身の直觀に於て、最も權威ある所の絶對的眞理である。全く絶對無條件的に妥當する所の眞理である。眞の哲學的意義に於て、*apodiktische Wahrheit* であり、*fundamente Gewissheit* を有つ所の眞理である。所謂哲學的コンスタンツといふものは、この純粹なる先驗性にあるのであつて、この先驗性がないならば、觀念的にも實在的にも存在といふことがなくなり、吾々の知覺的經驗すらも見られなくなるであらうと思ふ。吾々の哲學で

は、實在から認識が生ずるのではなく、認識から實在が生ずるのであるが、この直觀自證に於ては眞の實在があり、凡ての實在はこの純粹なる先驗性の上に立つて居る。價値はそれ自體に於て妥當するとは、この絶對體驗に於ける物自體に至つていへることでないかと思ふ。

認識するとは我が我を直觀することである、絶對自覺を得ることであるといふのは、このことであつて、勿論この絶對自覺の實在、純粹なる先驗性に於ては、吾々は實在を理解するに、最早それ自身以外のものを要せぬ、全くそれ自身の中に於て、それ自身によつて完全なる姿に於て理解されて居る。スピノーザが *Substanz ist das was in sich ist und durch sich erfasst wird, dessen Begriff also nicht des Begriffes eines andern bedarf.* といふたことは、こゝで觀照されるでないかと思ふ。吾々は表象主觀に對しては勿論のこと、判斷主觀に對しても實在的客觀といふものを期待することが出來ぬ。

これ等の主觀に對しては、只觀念的客觀を期待することが出來るのみであるが、吾々は只この判斷主觀の根柢に於て認めらるべき、認識以前の體驗の主觀に對して、初めて實在的客觀を考へられるのみである。覺鑊が『法相三論、天台華嚴の四乘は、人法に於て不生不滅をいへども、尙ほ一心を能生とし、諸法を所生とし、能所二生の義を

建立する』といひ、(興教大師全集一三五頁)この二生を建立せんとする根柢に溯つて、眞言が一實境界を考へるといふたのは、元その心境こゝにあつたのであると思ふが、この絶對體驗に於ては、最早主觀と客觀との區別はない、全くこの區別を超越したる純粹なる統一である。主觀が客觀であり、客觀が主觀である。所謂主客一致といふことは、吾々の先驗統覺と範疇とについていふことであるから、客觀的存在であつて、主觀の肯定的判断にまたぬものがあるといふことは批判哲學に於ては、承認すべからざる所であるが、主觀と客觀との一致は範疇の先驗統覺の場合よりも、理念の統一の場合の方が、一層純粹である、究竟的眞理に近いが、この理念の純粹なる直觀に於ては、最も理想的であると考へられる。理念定立の判断に於ては、なほ主觀に對して客觀を意識して居るが、この定立以前の直觀に於ては、最早兩者の對立はなく、未分以前の純粹なる統一として、全く一實在に結合して居る。この絶對統一に至つては、その論理以前であるために、吾々は最早何等の言語を以てするも、これを説明することが出來ぬ。只これを體驗することが出來るのみであつて、吾々はこれを統一といふ認識的言語で示すときは、その統一は既に墮落した統一であつて、眞の意味を破壊して居る。全くリッカートもいうて居る如く、かゝる統一その物といふものは、理論的

に概念で思惟することが出来ぬ、たゞ非理論的に體驗することが出来るのみである。吾々はこれを統一といふ言葉を以て示し、之れを體驗して居るといふことすら、すでにその眞意を破壊して居るのである。(認識の對象、第四版、二六〇頁)こゝに至るときは、吾々は最早言語を以て示すことが出来ぬ神秘があり、秘密があるが、吾々はカントの感性の直觀を排斥して、コーエンの思惟の生産を考へ、シュローペンハウエルの叡智の直觀を考へねばならぬ以上は、論理の必然として、こゝに達せねばならぬと思ふ、この絶對統一に於ては、自然は所謂作られたる自然であり、『我』は作る所の自然であつて、この兩者の分つべからざる一致の所に、我の永久の創造がある。創造的進化がある。吾々の意識する所のものは、只進化して來たものゝみであつて、未だ進化して來ぬ所のもの、未だ作られざる所のものに至つては、全く吾々のこれを知るに由もない神秘である。吾々の個人的精神もこの直觀の意識せられたるものとして發現し、自然界といふものも、同様にこの直觀の意識せられたるものとして發現して來る。吾々が個人に對して人格を認め、個物に對して全體を認め得るのは、この直觀があるからであつて、この直觀の中に、最も具體的形式の存在がある。實在は畢竟この直觀の中に内在するものであり、その純粹なる先驗性の上に實在するものである。吾々は

この直観の中に於て、存在といふものを、その最も純粹なる形式に於て具體的に見ることが出来る。

統一といふことは、只形式的統一ではなく、内容を有する統一でなければならぬが、こゝに至るときは、形式と内容との全く一致したる具體的統一がある。この直観に於ては、全く純粹なる姿に於て、形式と内容との結合が本源的に價值として、それ自身で妥當して居る。我は自然であり、又自然は我であつて、吾々は最早自然から教育的影響を受けるといふことはない。

全く自然的に一實在であつて、絶對無條件的に自然を創造する所に、吾々の教育の絶對的發展がある。不可思議なる言語を使用する様であるが、こゝに至る時は、吾々は最早何故に自然を創造せねばならぬか、又この創造によつて、自己を發表せねばならぬかといふ理由すらない、随つて又何故に自己を教育せねばならぬか、その理由もない。只絶對無條件的に自然を創造し、自己を教育せざるを得ぬのである。現實に對して目的を定立する程度の認識であれば、——既に述べたる所の理念を統整原理と見る所の認識が即ちこれである、——この認識であれば吾々は現實に對して教育せねばならぬが、こゝに至るときは、吾々は最早現實に對して目的を定立するのでは

ない、現在が即ち絶對目的である。随つて吾々は最早現實に對して教育せねばならぬといふことはない。現在が立派なる人格活動であり、純粹なる教育活動である、吾々は現實と目的との區別を超越して、絶對目的である如く、その教育的關係に於ても、理想と現實との區別を超越して、現在が絶對的教育活動である。

併しかく超越的に絶對的教育活動であるといふことは、吾々の現實的生活に關係なく、この生活の如何に關せず、只超越的にその理想に於て純粹なる教育活動であるといふのではない。

絶對的超越的であればこそ、現實的生活に對して當爲の絶對命令を以て、その教育を促がして來るのである。如何となれば吾々はこの絶對自覺即ち純粹なる先驗性に於て、絶對的構成活動であるといふことは、現實に對して目的的構成の教育性を與へる唯一の根源であるからである。純粹なる先驗性が現實の基礎である、現實性を作るものであることは既に述べたが、この先驗性といふものは、純粹なる認識の構成活動であり、目的的構成活動である以上は、この先驗性によつて作られたる現實といふものは、その根本に於て、教育性 *Bildlichkeit* を有つて居らねばならぬ。我が我を肯定する純粹なる先驗に、教育の絶對活動があると共に、又この先驗によつて現實性を

與へらるべき現實の根柢に、教育性といふものがなければならぬ筈である。吾々の現實的生活に於て、自發的に不可抗力を以て、内部から教育問題の起こるのは、吾々自身が本來教育的實在であるからであり、同時に世界も教育的實在であるからである。既に述べたるが如く、自覺に於ける、絶對的統一では、形式と内容との反對といふものは全くなくなつて居る。本來價值として、それ自身で妥當せる所の一實在であるが、勿論その統一に至つては、既にも述べたる如く、吾々が統一といふ如き認識的言語を使用することが、既に遅い。かゝる言語で表はさるべき統一を過ぎ去ること遠き彼處にある。この統一に於て、眞理が自己肯定の純粹なる活動である。こゝに至るときは、吾々は最早疑問に答ふる所の解答ではなく、何等の疑問もなき所の純粹なる自己肯定の眞理を有する。所謂 *Das Fraglose Ja* なるものを有するが、而もその中には、如何なる論理的、主觀にも缺くことの出来ない契機を有して居る。

全くそれ自身に於て妥當する所の永久の論理的絶對價值であると共に、又主觀と客觀との對立の根源として、凡ての認識の源泉となつて居る。この絶對自覺に於ては、吾々は超越的に眞理の自己肯定であり、自己によつて自己を理解し、自己を理解するに、自己以外のものを要せぬ底の自己肯定であるから、その中に認識上の主觀と客

觀との區別を生ずるを得ると共に、その差別界に於ける認識原理を生ずる。如何となれば、この絶對的自己肯定の活動の中に、その直接作用として、自己が自己を限定する作用がある筈である。随つて又同時に自己を他に對して限定する作用がある筈である。こゝに認識的世界に於ける主觀客觀の區別を生ずると共に、その差別界に於ける認識原理も具體的に創造せられる筈である。即ち自同律とか矛盾律とかいふものが創造せられる筈である。こゝに一般に思惟の對象の定立せらるべきは多言する迄もない所であつて、こゝではこれ以上に詳しく論ずることは出來ぬけれども、同時に又その中に個物の定立せらるべき契機を含んで居る。吾々の思惟及びその對象は全く我の絶對活動から發生する所である。我の先驗性によつて對象に實在性を與へることは、既に述べたが、吾々の認識では、實在は全く我の先驗から生産せられるものである。我の絶對自覺に於てその直接作用と考へらるべき我が我を肯定する作用の中に、吾々の認識原理が發生するのであつて、思惟原理は全く我の純粹思惟の生産である。余は本論文の初めに於て、吾々の認識作用を總括的に略説して吾々は感性の認識を反省するときは、悟性の認識について考へざるを得ぬ、この認識について反省するときは、理性の認識について考へざるを得ぬ。又この認識につい

て反省するときは、終に理念の絶對自覺について考へざるを得ぬと述べたが、かく低次の認識の反省の奥に高次の認識のあるといふことは、その高次の認識が低次の認識の基礎となり、發生原理となつて居るといふことであつて、吾々の認識は結局理性の純粹なる思惟の生産である。概念といふものは、一般にこの思惟を理論化せるものに外ならぬ。フリースなども理性を以て認識の直接能力であつて、悟性は只この認識を概念的に形式化するものに過ぎぬ、理性は範疇の源泉であつて、その認識形式は直接明晰とする所であるといふやうに考へて居るが、かく理性が悟性認識の根源として、其認識形式に自明であるのは、これ理性は悟性の自己意識であり、其發生原理であるからであつて、感覺的印象といへども、直接此統一の下に成立するものであり、現實性を與へられるものである。吾々の認識は感覺に初まるのではなく、科學的事實に初まるのであるが、此事實は本來理性の先驗統一の上に、その實在性を有するものである。即ち吾々の世界は、全く理性の純粹なる先驗性の構成する所である。余はこの點に於て、コーエンの主張する如く、世界は純粹思惟の生産であると考へたいのであるが、この生産の根柢は、判斷の形式を超越して判斷必然であるから、純粹なる當爲である。随つてこの純粹思惟の生産には、一般にその現實の内面に當爲が強

響いて居らねばならぬ筈である。當爲こそ實在の本質であるといへる。かゝる點から見るときは、吾々の認識は本來當爲を意識するにありといはねばならぬのであつて、一般に甲は甲であるといふときに、吾々は後の甲が初めの甲に等しいといふことを知るのが認識ではなく、この命題の根柢にある當爲を意識するのが認識である、この當爲の意識を得るときに、吾々は現實の強き統一を得られる。吾々はその認識に於て、この當爲を承認する毎に、その主觀性といふものを一層よく現出すると共に、その對象の客觀性といふものも亦進歩して來る。吾々の認識といふものは、當爲承認の形式で進歩するものであつて、認識の對象は當爲であり、超越的當爲であるといふのは、吾々がその認識に於て、本質的自覺に歸るべきことをいふものである、純粹なる自覺に歸るべきことをいふものであるが、この純粹なる自覺の當爲に至つては、その絶對的なるために、我々は當爲といふも既に當らぬ。當爲といふ言語を以て示すときは、既にその本質に當らざること、前に統一について述べたると同一である。ここに至るときは、最早あるべき筈であつて、そのあるべき筈の通りでないものがあるといふことはなく、凡てがあるべき筈の通りのものゝみである。故に最早普通の意味では、當爲といふことが出來ぬが、こゝに却つて普通の意味に於ける當爲の絶對根

源があり、吾々に對して當爲の犯し難き命令をする根源がある。認識を以て個人の意慾に任せず、一般的認識主觀の作用からすら獨立して、之れに當爲の絶對的命令を以て論理を徹底せしめねば止まぬ。認識論上では、一般に當爲として認識せられるものは、認識主觀を豫想するといふが、こゝに至るときは、最早少しもかゝる主觀について顧慮する所なく、全くこの主觀問題を超越して、主觀客觀の未分以前に於て、當爲が純粹なる形式に於て承認せられる。勿論かゝる當爲は、その妥當の點から見て、最早内存的であるといふことが出來ぬ、全く超越的であるが、その全く超越的なる所には、内存的たるべき唯一の契機を含んで居る。人は或は超越的當爲といふときは、現實には關係なきものゝ如くに想像するかも知らぬが、超越的であるから、當爲がそれ自身で妥當し、當爲が當爲を肯定するといふ所に、同時に内的必然的に内存的たるべき性質を有し、現實の絶對的統一的基礎たるべき原因を有する。リツカートは判斷意識一般から生ずると考へらるべき存在判斷が、之れと獨立なる當爲を承認するとき、意識内容換言すれば内存的世界が存在するのであるといふて居るが、(認識の對象、第四版、二八六頁)これを形而上學的にいふならば、客觀的實在も、判斷意識一般も超越的當爲の根柢に基いて、その實在たるべきことを肯定せられるのであるといへ

る。吾々の認識では、この超越的當爲が概念的には常に内存的實在に先んじて居る。即ちこの當爲が内存的實在の論理的基礎であつて、後者が必然的に前者から生ずると考へねばならぬ。吾々の認識では、常にその認識主觀に對して、絶對的に當爲の命令を與へるものゝあるのは、全くこのためである、この點は吾々の最も注意すべき所であつて、ソフィストに對して、一般的普遍的真理の實在を信じたるソークラテースが、自ら知りながら毒を飲んで死んだのも、その道德的認識主觀に於て、この超越的當爲の絶對命令があり、之れによつて道德的秩序の永久實在を保護すべき内的信仰の嚴然たるものがあつたからであると思ふ。

吾々はその認識に於て、かゝる精神に觸れたるときに、教育の本領を得られる。吾々はその認識的生活に於ては、只徒らに事物の知識を得るといふ様な常識の見解で、多くの知識を食ふ必要はない。知つて居る事物の數は少くともよいから、認識の本質を得た知識を得ねばならぬ。即ちその認識の根柢に於て、當爲の意識を得ねばならぬ。こゝに吾々の認識は、その内容からいふときは、簡單なるものであつても、その本質を得たものといへるのであるが、この當爲の意識を得るときは、吾々はその内的命令によつて何處迄も進歩する。加之、その超越的當爲の意識を得る場合に於ては

吾々は現在の教育活動に於て、絶對的價値を信ずるを得れば、又何處までも無限に進歩する。教育の品質を救済するもの、この外に方法がないのである。教育の方法が認識の方法と全然一致することは、昔からプラトーンやデカルト、カントよりペスタロッチなどの唱へて來て居る所であつて、今日では、ナトルブが最も熱心にこれを高調して居るが、かく認識の方法と一致するのは、これ認識が目的々構成的にあるからである。吾々はその認識に於て、自然を、目的に構成の當爲と見るから單純なる觀察に於ては、一個の轉化に過ぎざるものも、目的に系列の事變として、發達といふことになり教育といふことを要求して來る。かゝる點から見るときは、イデーを以て極限概念であるとする例の認識的態度は、我々の教育には最も注意すべきものであつて、吾々はこの哲學による所に、教育の可能もあれば、無限の進歩もある、吾々はその教育に於て目的を定立するを得れば、又同時にその手段を作つて往くことが出來、教育及びその材料といふものは、死したるものとならず、活きたる過程となることが出來るかゝる見地から、ナトルブが *Nur so ist von Bildungsinhalt zu reden, nicht als von totem Stoff, sondern von lebendigem Prozess, nicht als von einem Dasein, sondern einem Werden, nicht als einem Faktum, sondern einem fieri, nicht als von Geschaffenen, sondern als von ewig weitergehender*

Schöpfung. (Natorp, Philosophie und Pädagogik, S. 71) といふて居ることは、吾々の最も愉快とする所であつて、教育の可能及びその進歩といふものは、認識の方法以外には、全く考ふべからざるものである。

人も知る如く、ヘルバルト及びその學派では、教育の目的を立てるものは倫理學であつて、その手段を構成するものは心理學であるとするが、吾々は認識の方法を離れて、何處に教育の目的及びその手段を發見し得るであらうか。全く不可能といふの外はないのである。心理學は、かゝる一般的規範的方法を個人的ならしむるになければならぬものであるから、教育の實際に臨んでは、勿論必要缺ぐべからざるものである。教育が實際個人的に適切なるを得るか否かは、全くこの心理學の知識の指導によるの外はない。随つて吾々は實際に於ては、最も之れを尊重するが、教育の手段を發見するものは、心理學ではなく、認識の方法であることは、吾々の最も注意すべき所である。同時に又その目的を定立するものも、獨り倫理學とは限らぬ、一般に所謂規範學である。ナトルプの所謂客觀的科學であるが、吾々はその中に於ても、第一認識論に注意せねばならぬことは、勿論であつて、この認識論の方法が徹底するとき、吾々は論理から轉じて倫理に入り、フ・ヒテなど、共に、認識の本來實踐的なること

を注意せねばならぬに至るのである。實は以上述べたる所の認識的考察は、既にこの必要に迫つて居る。超越的當爲その物の承認といふことは、實はすでに倫理の立場に轉廻して居るのであるが、併し吾々はこの超越的當爲の承認といふことを、理性の問題として考へることは出来ぬではなく、否哲學としては、何處までも之れをこの立場から考へる必要がなくならぬのである。自由といふものも、吾々の理性の承認肯定をまたなければ、學問の問題となることが出来ぬことは勿論、實は人間生活に於て、その思想が吾々に浮び出る途すらないのである。吾々は超越的當爲を考へるが、少しも論理の立場から考へる必要を見ぬに至るものではなく、何處までもこの立場に於ける攻究を徹底する必要があるのである。かゝる點から見るときは、古來哲學史上多少の消長があつても、所謂主知主義の考へ方の絶えないのは、故ある所であるといはねばならぬと思はれる。余の本論文は、もと教育の論理的基礎の終りに於て考へらるべき哲學問題を豫想しつゝ、「自然と教育」の關係について考察したるものの終りに近い部分の小研究であつて、勿論この論理の立場で攻究したものである。随つてこの論文では、言ふべくして未だいはないものゝあることは、余も十分承知して居るが、併しそれかといふて、この新問題に移る迄にいはねばならぬことをいふて

置くことは、猶ほ更ら必要である。余はこの立場に於て、前に述べた如く吾々は論理の問題として、既に超越的當爲を承認せねばならぬ。こゝに客觀的實在の根源もあれば、主觀作用の內的必然的根源もあることを認めねばならぬものと思ふ。實在と判斷の意味をつくる所の概念との必然的結合といふことは、現實の認識論的問題には、もはや疑ふことの出来ない決定的問題であり、批判哲學の鐵案であるが、吾々はこの必然的結合の基礎に於て、超論理的當爲の絶對的結合を認めねばならぬのであつて、こゝに客觀的實在性の根源もあれば、主觀作用の根源として、之れに當爲の絶對的命令を與へるものもあるが、この當爲の體驗から見るときは、教育の内容は只活きて居るとか創造的であるとかいふに止まらぬ。內的必然の絶對的命令を有つて居る創造的進化であり、發展である。吾々はその認識反省の根柢に於て、この超越的當爲の絶對命令の強き響を得たときに、その認識問題の根本的解決を得られ、勿論現在その教育に對して絶對價値を信ずるを得れば、又何處までも進歩して止まる所を知らぬ。

昔、顔回は好學の士であつて、陋巷にあつても、その樂を改めなかつたといふ話であり、曾て孔子を仰ぎ膽て、夫子循々然として善く人を誘ふ。我を博むるに文を以て、我

を約するに禮を以てす。罷まんと欲すれども、罷むこと能はず。既に我が才を竭す、立つ所あつて卓爾たるが如し。これに従はんと欲すと雖も由なきのみといふたが、恐らくこの顧回の態度の中にはかゝる當爲の絶對命令があつたのではなからふかと思ふ。教育の進歩といふことは、理念定立の程度の認識に於ても、見ることが出來、當爲の意識のある所には、之れを見ることが出來るが、困難を忘れて、その進むことを知つて、退くを知らずといふ様に進取するには、最早當爲の意識ではなく、之れを超越した絶對的命令がなければならぬ。

吾々の認識では、當爲から實在が生ずるのであつて、實在から當爲が生ずるのではない。随つて吾々は實在を認識するから、その知識が尊いのではなく、かゝる實在の認識はなくとも、普通の事物の認識であつても、その認識の根柢に當爲の意識を得るから尊いのであつて、此當爲の認識のある所に、却つて論者の認識せんとして居る所の實在が、唯一の方法によつて、吾々に肯定せられるのであつて、所謂客觀的實在といふものも、この當爲の超越的なる所にあるのである。この當爲こそは、すべての客觀的存在に實在性を與へ、これを以て科學的事實として居るのみでなく、なほその科學的研究を何處迄も追究せねば止まぬ命令を以て居る。勿論かゝる純粹なる當爲の

實在に於ては、既に一言したる如く最早あるべき筈であつて、そのあるべき筈の通りでないものはない、全くあるべき筈のものが純粹なる形式に於て、そのあるべき筈の通りのものとなつて居る。空海が一實境界を考へ、その内容を叙して、「若しよく密號名字を明察し、深く莊嚴秘藏を開かば、則ち地獄天堂、佛性闡提、煩惱菩提、生死涅槃、邊邪中正、空有偏圓、二乘一乘、みなこれ自心佛の名字焉れをか捨て、焉れをか取らむ」といふて居るが、(秘密曼荼羅十住心論、卷一)全く此通りであつて、吾々は最早この實在界に於ては、偽とか悪とかいふものを見ぬ。この世界に於ける悪も善に變はり、偽も眞によつて代表せられて居る。全く純粹なる當爲の理想である。こゝにはあるべき筈より以外のものはない。而して此あるべき筈のものゝみの純粹なる當爲が、この現實的世界に對して、絶對的にその本來あるべき筈の通りのものであるべきことを要求するから、吾々は第一その認識的生活に於て、嚴格なる態度の論理的構成に基く教育といふものを要求して來る。教育が吾々に内的必然となるのである。

併しもしかりに、吾々はこれを以て所謂與へられる實在であるとなし、認識の鐵案を轉倒して、認識から實在を得るのではなく、實在から認識を得るのであるとするならば何如。勿論吾々はこれを認識することが出來ぬ。かゝる獨斷的實在があると

いふた所が、吾々はその實在に對して本來關係を有たねばならぬといふ必然的理由を有たぬから、毫もこれを認識し得べき可能を見ぬ。人は或は眞如の世界であるとか、絶對の世界であるとかいふものになるときは、純粹なる理想の世界であつて、所謂聞提も菩提であり、地獄も天堂であるといふ様に考へ、只吾々はこれを認識することが出来さへすればよいのであるが、未熟の者には認識することが出来ぬから、この現象的世界の迷蒙の見に囚はれるとする。かくて彼れ等は、一圖にその認識を得んとして努力するのであるが、果して彼れ等の想像する如く、この實在は認識されるものであらふか。全く不可能といふの外ないのである。勿論かく獨斷的に想像しても、その實在なるものは、人間の想像し得る限り、高尚なるものたるを得るであらふ。併しこれを認識し得ざる限り、その實在なるものは、吾々には、全く無關係であり、價値なきものである。或は一步をゆづつて、かりに之れを認識する事が出来るとしたならば、どうであらふか。一度吾々はその實在を認識するときは、その客觀的定在的絶對であるために、以後は最早進歩の必要を認めなくなる。吾々の認識的生活といふものは、その根柢に於ては、全く固定枯死して終はねばならぬ。のみならず、一體この固定的實在の認識に於ては、これに達すれば意味あるものであるかも知らぬが、達する

までの途中は、全く準備的階段に過ぎぬのである、それ自身の意味を認められぬ。彼等はその認識過程に於て、現在價値を發見すること能はぬから、自然眞面目なる思惟を缺いで來るのみでなく、實はその目的とする所の實在の認識なるものは、本來不可能であるから、終に眞面目なる思惟に入るべき時期がない。その認識過程に於て、目的とする所の實在を認識したかと思へば、實際認識したものは、只その一屬性のみであつて、眞の實在といふものは、認識されて居らぬ。認識したかと思へば、忽ちその思想の圏内を脱して、未だ思惟も遠く及ばざる所の彼岸に走り去つて居る、所謂 flying goal であつて、何處まで進んでも、その實在なるものは終に認識し得る所とならぬ。

青年で詩的想像に富んで居るときは、或はかゝる實在も認識されるものゝ如くに想像して、努力するかも知らぬが、少しく科學的に研究して見ると、ことごとく豫期に反して、無益の骨折りたるを發見して來る。實在の認識に對しては、全く自己の無能力を承認するの外なきに至り、その思惟に於て言ふべからざる苦痛に惱まされ而してその救済の見込がつかぬから、自然自暴自棄に流れると共に、その自然的形而上學に對しては、その獨斷的たるを知らぬから、動もすれば永久的眞理に對する尊敬の念を捧げ、之れによつて僅かに人間たるの品格を保たんとする。隨つて墮落と形而上學

的驕慢とに満ちたる性格とならざるを得ぬ。人々はその獨斷的哲學によつて、一個の城壁を築くから、一般の社會生活とは孤立せる所の特殊の階級を作り、一般國民を指導するよりも、却つて之れを俗人といふやうな無禮なる名稱を以て呼び棄て、而して自らはその俗人も敢てすること能はざる所の不徳義を敢てして、少しも之れを恥とせぬ様になる。

如何に進歩せる思惟であつても、その根柢に於て獨斷を有するとき、只その一點に於て一切の進歩を失はざるを得ぬ。その結果、自然的に生活が皮相的となり、實際生活上に於ては、教育といふものは、生活を構成すること能はず、實際生活と教育とが互に相背馳する様になる。随つて教育といふものが眞面目に行はれず、これを以て只天才のなすべき遊戯であるといふやうに考へ、一般には只生活の外觀を飾るために之れを施すに過ぎぬいふやうになる。勿論凡ての教育に對して怠惰であつて、勞力を吝み、只生活の僥倖にのみ期待せんとする。その弊害たる實に恐るべきものであつて、彼れ等はその社會生活中に於て、一階級を作り、常に罪惡の種を蒔いて往くばかりである。國民から分離して、特殊階級を作り、國民に墮落腐敗の種を植えて往くのみである。古來獨斷的に或る思想を以て、國民や社會を統一し、その進歩發達を將

來せんとしたものの多いことは、吾々國民の歴史上に於てもよく見る所であるが、其の根柢が本來國民の歴史的發展に背いて居るものであるから、或は一時はその新規なる思想のために、國民の歴史的發達に資する所があるかも知らぬが、結局國民の思想發展の上に大なる暗礁となり、その統一の上には、大なる隔壁となり、色々の方法で歴史の發展の妨害となる。社會の墮落腐敗を招くより、外なくなる。

余は何處までもこの獨斷的哲學の弊害を明晰にして置かねばならぬが、その弊害は恐らくこゝに止まらぬ。超自然的に實在を考へる幼稚なる獨斷的形而上學について、こゝに論ずる必要はないが、進歩せるものでは、その實在を内存的のものであるとする。世界は絶對の發現として、それ自身で絶對である。一々の現象は皆絶對價値を有せるものであるとする。併しそれならば、吾々は少しもその間に人工を加ふべき必要を有たぬ筈である。吾々は全くジュームスも批評したる様に、世界をして獨りそれ自身の途を往かしむればよい。吾々は世界それ自身のなす所を以て、吾々のなす所よりも遙かに立派である、世界には吾々のなすべきものが少しもないと考へて、謂はゞ道德的休日を何時までも取つて居ればよいのであつて (James, Pragmatism. P. 74) 少しも努力する必要はない筈である。絶對を認識するとかいふ問題

すら考へる必要がない。かゝる問題が設令念頭に浮んで來ても、吾々は之れを必要なき問題として、棄て、終へばよい筈である。併しかくの如きことが、果して正當なることとして、吾々の承認し得べきことであらふか。

宇宙が絶對から成るといふやうなことをいへば、非常に立派なるものゝ如くに想像するかも知らぬが、かゝる自然的形而上學は、その實全く沒價値にも等しき汎價値に過ぎぬのである。尊ぶべき人間の努力を、根柢から否定する。世にかくの如き奇怪なる哲學は認められるであらふか。恐らく論者自身も斯かる歸結になるとは、想像せざる所であつて、只詩的想像的にその自然的形而上學的實在の立派なることを考へて居るに止まつて居るから、その哲學がかゝる淺ましき歸結を伴へることを知らぬのである。借問するが、一體かゝる實在は何處にその根據を有するのであるか。論者自身がかゝる實在を求めんとする理性の中に、根據を有するのではないか。イデオとして求めて居るのではないか。然らばその實在を求めんとするの考へは、一變せなければならぬ筈である。

こゝに哲學は前にも述べたる如く實在から認識に進むべきではなく、認識から實在に進むべきであるといふ正當なる立場に轉廻し、既に述べて來た如く、吾々はその

認識の各階段に於て、凡て論者の得んとして得ること能はなかつたものを得るのみでなく、その絶對體驗に於ては、客觀的實在を捕捉するを得れば、而も當爲の絶對命令を有つた實在を捕捉することが出来る筈である。吾々自身が當爲實在として尊ぶべき人間努力を破壊する代り、何處までもこれを保護し、無限の人間努力の源泉として第一その認識的生活に於て、何處までもその研究を要求し、寸毫の不徹底をも、誤謬をも容さぬ態度を採るやうになる。純粹なる體驗に於ては、この世界に於ける、僞も眞によつて代表せられ、惡も善に變つて居るから勿論地獄天堂、佛性闡提みなこれ自心佛の名字には違ひないが、自心佛の名字であるだけ、吾々自身に對して當爲の絶對命令を有するものである。人間努力を輕んずる様な淺ましきものではなく、教育の必要を全爲否定するやうなものではない。絶對的命令を以て、之れを要求するものである。